

# オープンキャンパスとAO入試

東北大学 鈴木 敏明, 夏目 達也, 倉元 直樹

## 1. 調査の主旨とアンケートの構成

本研究は平成12（2000）年度から開始したもので、本報告は主に平成13（2001）年度の新入生を対象にした調査結果に関するものである。平成13年度の東北大学入学者に対して入学手続き書類の中に本アンケートを加えて配布し、回収した。したがって、本報告は平成13年度入試、4月入学の入学手続き完了者に対する全数調査に関するものである。なお、年次比較のために平成12年度調査結果も加えて報告する。

本調査のアンケートは平成12年度調査と同様、基本的に2つの部分から構成されている。「表面」はAO入試、「裏面」はオープンキャンパスに関する内容である。調査の継続性を重視し、平成12年度の調査票からの変更は最小に抑えた。平成13年度調査の変更点は、日付の他には「Q6. あなたは平成12年度の東北大学のオープンキャンパス（平成12年7月31日、8月1日開催）に参加しましたか？」という質問に「2: 昨年は行かなかったが以前に参加経験がある」という選択肢を加えたことである。高校1、2年生の段階でオープンキャンパスに参加する者が数多くいることが判明したためである。

平成13年度の有効回答者数は全体で2,417名であった。これは入学手続き者数2,427名に対して99.6%の回収率であり、平成12年度に続きほとんどの調査対象者が調査に応じたことになる。

平成13年度AO入試による入学者は、理学部ではAO入試II期で39名、歯学部ではAO入試III期で10名、工学部ではI期からIII期までで合計186名である。なお、AO入試IV期（工学部）（10月入学）2名の合格者は本調査の対象外である。

本報告は、主に選択肢形式の質問項目に関する分析結果を中心とする。

## 2. オープンキャンパスに関する分析

東北大学のオープンキャンパスへの参加者は、2日間合計で平成12年度では9,468名、平成13年度では11,450名である。

東北大学入学者の中で前年度（平成13年度調査では平成12年7月31日、8月1日）のオープンキャンパスに参加した者の比率は16.0%（363名）と、平成12年度調査の16.3%に対してほとんど変わっていない。これに過去の年度に参加した9.1%（206名）を加えると、実に25.2%（569名）の者が1度はキャンパスを訪れ、東北大学の研究活動の一端に触れた上で入学して来ていることになる。

地域別に見ると、前年度と比べて東北地方、中国地方の出身者の参加率が下がったが、それ以外の地域の出身者の参加率は向上した（図1）。東北地方の出身者の参加率低下が質問項目の変更によるものか、実質的な低下を意味しているのかは判断がつかない。

次年度以降の調査である程度明らかにできるものと思われる。

一方、平成13年度に新たに付け加えた直前の年度より前のオープンキャンパス（すなわち、

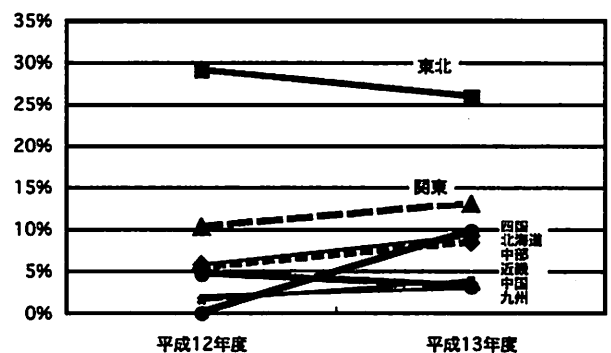


図1. 前年度オープンキャンパスへの参加率

平成13年度調査では平成11年以前。以下、「過去」のオープンキャンパスと記載する。)への参加経験であるが、全体では9.1% (前年のオープンキャンパス参加者を除く)の者に参加経験があった。地域別の内訳は、東北地方出身者が19.4%、関東地方出身者が3.8%、中部地方出身者が1.8%で、それ以外の地域からの参加者は皆無であった。前年度の参加者と合算すると、東北地方の出身者の約半数近く(45.3%)は受験する以前にいずれかの時点で東北大学のオープンキャンパスを経験した計算になる。

さらに、他大学のオープンキャンパスへの参加を尋ねた質問項目と合わせ、いずれかの大学のオープンキャンパスに全く参加しないままに東北大学に入学したと推測される者の比率は、平成12年度調査で75.9%、平成13年度調査で65.9%であった。質問項目に改変が加えられているので単純には比較できないが、少なくともオープンキャンパスを通じて大学の活動を垣間見た上で入学してくる者の比率が増えていることは確かなようである。ちなみに、東北地方出身者だけに限った場合、その比率は66.6%、50.5%とさらに下がり、本学のみならず、一般的にオープンキャンパスを利用した大学情報の収集活動が進路選択の上で無視できないものになってきていることが伺われる。

東北地方の各県別の参加率に関する分析からは、各県のオープンキャンパスに対する考え方の違いを感じとることができる。図2は、各県出身者の東北大学オープンキャンパス参加率の推移である。山形県からの参加率が増え、岩手県からの参加率が減ったため、県別の順位は逆転したが、依然としてこの2県からの参加率は高い。福島県、宮城県、青森県からの参加率は下がったが、青森県からの比率が特に大きく落ちたため、福島県と青森県の順位が逆転した。秋田県は2年間を通じて最も参加率が低い。

一方、今回付け加えた過去のオープンキャンパスへの参加を加えると、様相がやや変わる(図3)。山形県出身者は過去の参加率も比較的高い。合計すると6割近くの者が1度はその機会に来学している勘定になる。宮城県、青森県出身者は、前年度よりそれ以前の年度のオープンキャンパスへの参加率が高い。その結果、合計した場合には相対的に過去のオープンキャン

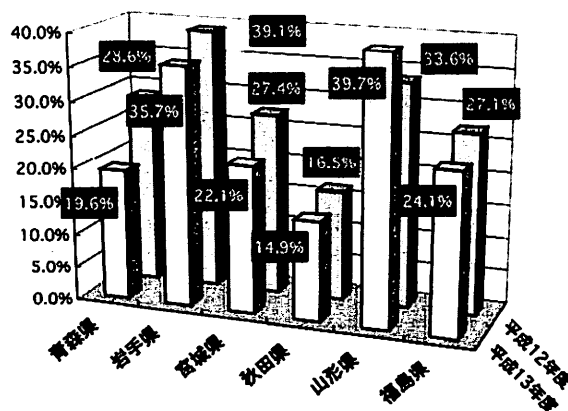


図2. 東北地方各県の前年度オープンキャンパス参加率

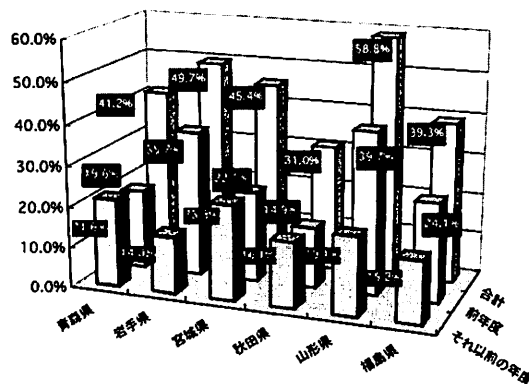


図3. 東北地方各県のオープンキャンパス参加率 (平成13年度調査)

パスへの参加率の低い岩手県出身者との差があまり目立たなくなる。福島県出身者は過去の年度の参加率が岩手県に次いで2番目に低く、その結果、合計すると秋田県に次いで下から2番目の比率となる。秋田県出身者は前年度の参加率より過去の年度の参加率が高いが、それでも全体としては山形県出身者の半分程度の比率である。大別すると、全体として積極的にオープンキャンパスへ参加しているのが山形県、受験年度での参加に力を入れているのが岩手県と福島県、受験年度以前の参加に力を入れているのが宮城県、青森県、秋田県といった区別が出来るようである。

オープンキャンパスの開催は、大学にとってはかなりの負担である。もちろん、オープンキャンパスは受験生獲得のためだけに開催される

のではない。東北大学への受験を全く考えていない高校生や一般の方々に大学の研究活動を知ってもらうことも大いに意味がある。また、それ以上に、高校生の将来設計の明確化や進学動機の向上に寄与し、勉学意欲を引き出す効果があるならば、参加者が結果的に他大学に進学したとしてもその教育的意義は大きく、東北大学の担う社会的使命は十分に果たされていると考えるべきである。しかし、それでも参加する高校生、受験生の進路選択にあまり寄与していないのならば、費用対効果という側面からその存在意義を疑問視する声があっても仕方がない。

それでは、オープンキャンパスへの参加は進路選択に実際にどの程度の影響を及ぼしているのだろうか。図4は、オープンキャンパスが進路選択に及ぼした影響について、過去に自分が入学した学部のイベントに参加した経験がある者に限って分析した結果である。年度に関わらず、また、参加したのが入学前年度であるか、それ以前であるかに関わらず、「参考になった」という回答が6割を超えている。ただし、「決め手になった」という比率は、参加した時点によって多少の違いがある。前年度のオープンキャンパスに参加した者ではその比率が約1/4に達しているのに対し、過去のオープンキャンパスへの参加では約1/6に過ぎない。以上の結果から、前年度か過去かでは若干の違いがあるが、オープンキャンパスが受験生の進路決定に対しても十分大きな影響力を持っていることが示された。

乱暴な試算ではあるが、平成12年度のオープンキャンパスに参加をして平成14年度以降に東北大学に入学する者が、今回の調査で「過去のオープンキャンパスに参加した」と回答した者と同数程度いると仮定するならば、オープンキャンパスの参加者のうち、実に5～6%程度が

実際に入学してくるという試算になる。参加者には一般の方々、教員等、潜在的な受験生に該当しない人も一部含まれているので、調査漏れがなければ実際の比率はもっと高いといえるかもしれない。オープンキャンパスは直接的な受験生獲得としての広報効果も非常に大きいと考えられるのである。

### 3. AO入試の受験に対するオープンキャンパスの役割について

オープンキャンパスへの参加がAO入試の受験に及ぼした影響について述べる。

昨年度同様、平成12年度入試からAO入試に参加したのは歯学部、工学部、平成13年度から新たにAO入試に加わった理学部の3学部のうち、調査データが十分に多い工学部、理学部について分析の対象とする。

表1は、オープンキャンパス参加・不参加別のAO入試受験率を比較したものである。なお、ここでもAO入試で合格したか、AO入試では不合格ながら一般選抜入試で入学したか、ということは区別していない。

平成12年度の調査結果と同様、「前年度のオープンキャンパスに参加する」ことが、「AO入試を受験する」ことに密接に結びついている。工学部のデータでは、前年度のオープンキャンパスに参加した者のうち、AO入試から受験した者の比率が平成12年度調査の55.2%から僅かながらも向上した。しかしながら、過去のオープンキャンパス参加した者にとっては、それがAO入試の受験へ結びついていないことも今回の分析で明らかになった。

表1. オープンキャンパスの参加とAO入試受験率（平成13年度調査）

	AO入試を受験		AO入試を受験せず	
前年度のオープンキャンパスに参加（工）	59.2%	77名	40.8%	53名
過去のオープンキャンパスに参加（工）	27.0%	20名	73.0%	54名
オープンキャンパスに参加しない（工）	18.7%	117名	81.3%	510名
前年度のオープンキャンパスに参加（理）	44.9%	22名	55.1%	27名
過去のオープンキャンパスに参加（理）	8.7%	2名	91.3%	21名
オープンキャンパスに参加しない（理）	10.9%	27名	89.1%	221名

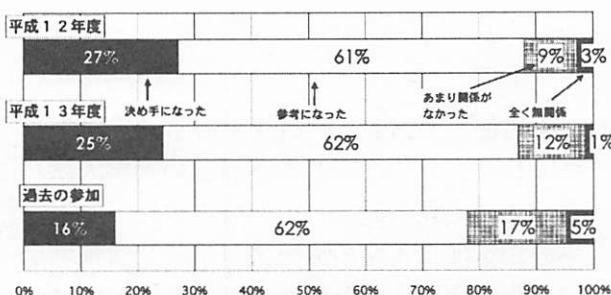


図4. オープンキャンパスが進路決定に及ぼした影響

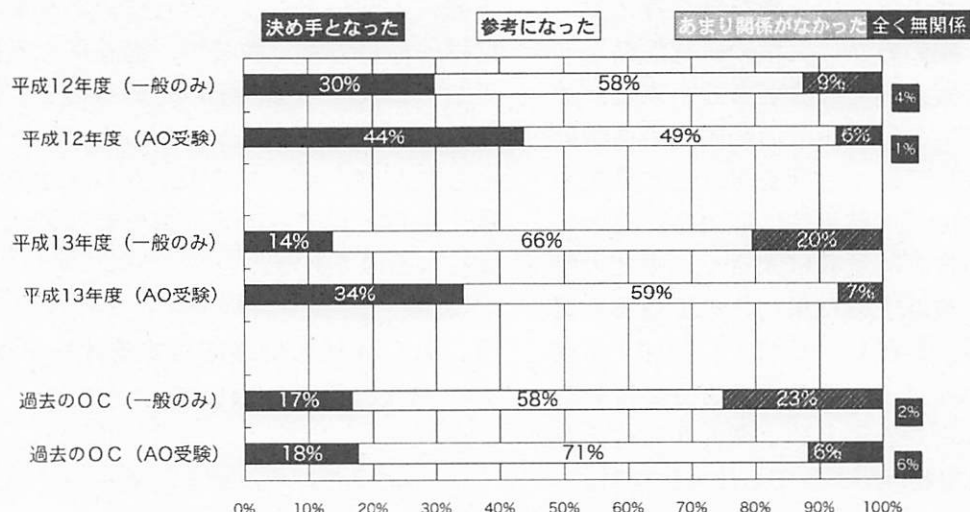


図5. オープンキャンパスが進路決定に及ぼした影響（受験区分による比較。工学部のみ）

ひとつの副次的な原因として考えられるのは、既卒生（浪人）の存在である。工学部の通常の受験生を対象としたAO入試区分のうち、II期（定員75名）は既卒生に受験資格を与えていない。また、理学部や歯学部では既卒生が受験可能なAO入試の区分がない。きちんとした調査データに基づく議論ではないが、浪人時代にオープンキャンパスを訪れる者は比較的稀であろう。したがって、東北大学のオープンキャンパスへの参加経験があり、それが東北大学を志願する動機形成に大いに寄与したとしても、それらの者たちにはAO入試を受ける機会が卒業見込み生（現役生）ほど開かれていないという事情がある。

一方、もうひとつの推測は、過去のオープンキャンパスへの参加が進路決定過程にさほど寄与していないのではないか、という捉え方である。図2に見られるように、確かに、オープンキャンパスが「決め手」になって進路を決めた、という新生は入学前年度に参加した者に比べて少ない。しかしながら、「参考になった」というレベルであれば遜色ない。

実は、この議論の前提として、「自分のやりたいことが明確な人はAO入試を受験してください」という東北大学のメッセージがオープンキャンパスを通じて受験生に伝わり、AO入試の受験に結びついているという推論（夏目他，2001）がある。そのロジックは、AO入試の受験者は一般選抜入試のみを受験してきた者よりもオープンキャンパスが進路の決め手になって

いる比率が高いのではないかと、という仮説に結びつく。

図5は、その点に関して、2年間の調査を通じてAO入試の受験者が十分に揃っている工学部のデータについて分析した結果である。分析の対象は、オープンキャンパスで工学部のイベントに参加した経験を有する者である。平成12年度と平成13年度でやや数値に違いはあるが、前年度のオープンキャンパスに参加した者の間では、一般選抜入試のみを受験した者よりAO入試を受験した者の方が、オープンキャンパスが「決め手」となって進路を決定したと回答した者が多いことが確かめられた。一方、過去のオープンキャンパスへの参加ではそのような傾向は見られない。

現状では、オープンキャンパスが進路の決定的な要因として機能し、それがさらにAO入試の受験へと結びつくためには、ある程度志望が固まってくる受験の年（3年次）に足を運んでもらうことが効果的なようである。

### 文献

夏目達也他（2001）「高校と大学のアーティキュレーションに寄与する新しい大学入試についての実践的研究（中間報告書）」、平成12年度日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究(A)）、研究課題番号：12301014、研究代表者：夏目達也